

特撮物から見た日本の英雄

鄭恵潤 (ジョン・ヘユン)

1. はじめに

日本には7つの全国放送ネットワークがあるが、そのうち、2つは公営放送で、残り5つは民営放送である。そして、それら以外にも数多くの地域放送や衛星放送などがあるので、いつテレビをつけても、一、二のチャンネルで子供の番組を見ることはそれほど難しくない。20分から30分くらいの長さで製作される子供の番組は大体1年くらい放送されてから、似たような他の番組に切り替えられる。こういった子供のプログラムは3分の2程度がアニメーションだが、そのなかでも大袈裟な衣装を着た俳優が直接演技するドラマ形式の子供番組は子供たちにとっても人気がある。

ここでは、こういったドラマ形式のプログラムを中心に、3歳から6歳の就学前の児童、特に男の子を主な対象とする番組を通して、日本の英雄像を考察してみたいと思う。

2. ウルトラマン

日本の子供向けのテレビ番組に出てくる英雄の中で、一番人気のあるのは恐らくウルトラマンであろう。『ウルトラマン』は、『ゴジラ』で特撮怪獣映画のブームを引き起こした円谷プロダクションがテレビ番組として製作した特撮ドラマシリーズである。初期作『ウルトラ Q』(1966年1月～1966年6月)は、アメリカCBSの超ヒットドラマ『The Twilight Zone』の方式をそのまま踏襲した、いろいろな面で初期作ということを感じさせる作品だった。そして、ついにシリーズ最初のヒット作『ウルトラマン』(1966年7月～1967年3月)が放送される。『ウルトラマン』ではアメリカのドラマの方式を利用しながら、それに『ゴジラ』で築き上げてきた日本式の怪獣物を適切に混ぜ合わせて、アメリカのヒーローとは一味違う‘巨大化したヒーロー’という日本特有のパターンを創り出した記念碑的な作品だった。つまり、巨大な怪獣の相手をするヒーロー、ウルトラマンが自らも巨大になって、怪獣と闘うという斬新な発想であった。

また、『ウルトラマン』には日本のテレビ史上、初めてのカラー特撮物という歴史的な意味もある。

『ウルトラマン』に続いては『ウルトラセブン』(1967年10月～1968年9月)と

『帰ってきたウルトラマン』(1971年2月～1972年3月)が放送される。特に『帰ってきたウルトラマン』は東映映画社の『仮面ライダー』シリーズとともに、1960年代の第1次怪獣ブームに続いて、1970年代初め頃の第2次怪獣ブームを主導した作品だと言える。その後も『ウルトラマンエース』(1972年4月～1973年3月)、『ウルトラマンタロウ』(1973年4月～1974年4月)、『ウルトラマンレオ』(1974年4月～1975年3月)、『ザ・ウルトラマン』(1979年4月～1980年3月)、『ウルトラ80』(1980年4月～1981年3月)が次々と放送された。

しかし、1980年代に入ると、『ガムダム』など、リアル・ロボットのアニメーションの人気によって、アニメーションの人気が高まり、その結果、特撮物は沈滞期を迎えるようになった。こういう雰囲気の中でウルトラマンは一時期、姿を消したが、永遠のヒーローであるウルトラマンは1990年代に再び復活する。そして、『ウルトラマンテュガ』(1996年9月～1997年8月)と『ウルトラマンダイナ』(1997年9月～1998年7月)を通してウルトラマンは再び登場する。

3. ウルトラマンとスーパーマン

約半世紀の間、日本人に愛され続けてきたヒーロー、ウルトラマン。日本人は果たして、その自分たちが作った英雄を通して何を見てきたのだろうか。そのウルトラマンの特徴を明らかにするために、ここではウルトラマンとアメリカの代表的な英雄であるスーパーマンを比較することにしよう。ウルトラ(Ultra)とスーパー(Super)はラテン語がその語源で、両方とも‘ある物の上にある’或いは‘ある物を乗り越えて’という意味を持っている。しかし、ウルトラマンとスーパーマンの間には大きな差がある。言ってみれば、スーパーマンは‘スーパー’個人主義者である。彼は一人で空を飛び回る。彼にはスーパー母も、スーパー父もスーパー兄弟もない。アイコンとしてのスーパーマンはいつも悪に対抗し、一人で闘う寂しい英雄である。

それでは、日本の英雄、ウルトラマンはどうであろうか。確かに、ウルトラマンも一時期は一人であったが、『ウルトラセブン』、『ウルトラマンエース』、『ウルトラマンタロウ』、『ウルトラマンレオ』、そしてアニメーションとして製作された『ザ・ウルトラマン』と『ウルトラマン80』などと、シリーズを重ねていくにつれて、ゾフィのようなウルトラマンの兄弟や、ウルトラの母、ウルトラの父までもが登場する。こうして、ウルトラマンの家族はますます増えていった。

最初は一人で怪物たちと闘ったウルトラマンであったが、このように彼に家族がどんどん増えていった理由として、まずは商業的な側面を指摘しなければならないであろう。実際に、この幸せなウルトラマンの大家族がもたらした利益はウルトラマンの人形や、衣装、ステッカーなどを見れば、すぐ分かる。

しかし、理由はそれだけではない。ウルトラマンは格闘に関しては強いのかもしれ

ないが、スーパーマンのように男性的ではない。スーパーマンはアメリカン・フットボールの試合の後、ロッカー・ルームで汗まみれになっている、健康な体格の筋肉質の男性のようなイメージであり、彼のタイトな衣装は男性の性器を暗示する。一方、スーパーマンに比べて、ウルトラマンは中性的であり、むしろ女性的とも言える。ウルトラマンの下半身はプラスチックで滑らかに作られているだけである。筋肉質の体が象徴しているように、スーパーマンは、敵との闘いで次々と勝利を収めていくほど強い反面、ウルトラマン（そのなかでも特にウルトラマンタロウ）は、時々危機に陥り、助けを求めたりもする。ウルトラマンタロウが怪物と闘う時、彼の光線は時折、その威力を発揮することができなくなる。セブンとエースはそのようなウルトラマンタロウを助けたり、アドバイスをしたり、励ましたりする。スーパーマンは孤独だが、強くて、面白く、独立的な、いわゆるアメリカの理想なのだ。実際、多くのアメリカ人が移住者であるように、スーパーマンも昔、自分の惑星を離れて、アメリカに移り住んだ移住者である。彼は人間に内在している力を発揮する、アメリカ人の心の中にある英雄であり、ユダ・キリスト教の伝統が生み出した典型的英雄の一人である。彼は自分に対して、圧倒的に強くて、巨大な悪党と闘い、勝利するほどの内面的な強さを持っている。

それに比べ、ウルトラマンは平凡で、少なからず日本的な要素を持っている。彼が怪物をやっつけることができるのは、怪物を圧倒する彼の体の大きさや、いつでも助けを求められる仲間がいるからだ。他人を信頼して、頼るという点で、ウルトラマンは日本人に違いない。ウルトラマンにスーパーマンのような内面的な葛藤は見つけにくい。まるで、害虫を駆除するかのように、彼は機会的に、汚い怪物を倒していく。怪物が地球を（日本を）危機に陥れようとすると、どこからかすぐ飛んでくるウルトラマンは、突然現れ、日本を奇跡的に助ける神聖なる風、神風にもよく似ている。

最初のシリーズが放映された 1967 年頃、ウルトラマンの人気は絶頂に達しており、その時の視聴率は 42.8% を超えた。これは約 4,000 万の人がウルトラマンを観たことになる。その後、『ウルトラマンレオ』に至っては 10% の視聴率を保つのも難しくなった。『ウルトラマン 80』は『ウルトラマンレオ』よりは善戦したが、やはり以前の人気を回復することはできなかった。これは、円谷プロダクションに長い間、新しいシリーズの製作をためらわせた原因となる。彼らが『ウルトラマンレオ』と『ウルトラマン 80』から得た教訓はこれ以上平凡なウルトラマンは売れないということであった。元祖ウルトラマンの人気は期待以上のものであったし、人々はますますその名にふさわしいものを望むようになった。こうして、ウルトラマンは消えていった。

4. 五人組の英雄

1) 戦隊物

日本のテレビに登場する英雄はいくつかの範疇に分けることができる。そのなかの一つが今まで見てきたウルトラマンのような巨大なスーパー英雄である。もう一つの類としては5人の仲間で構成されるグループ型の英雄を挙げることができる。

毎年東映映画社は新しいバージョンの五人組グループを作り出すのだが、これは主に朝日テレビで金曜日の夜5時30分から放送される。この番組を観る700万人の視聴者のうち、80%くらいは3歳から7歳までの子供たちである。この番組の製作者たちは3歳から7歳ぐらいまでの日本の子供の90%がこの番組を観ていると推定している。

五人組戦隊シリーズの人気は、『デンジマン』が放送された1980年に絶頂に達したと東映映画社は言う。最近放送されている戦隊シリーズが7%台の視聴率であるのに対して、『デンジマン』は平均16%の視聴率を記録した。『デンジマン』シリーズの放送が長期にわたるにつれて、比較的高い年齢層の視聴者を失った反面、就学前と低学年の視聴者はそのまま維持することができたが、これは日本ではよく見られる現象である。視聴者の平均年齢が低くなるとともに、視聴者の性別構成割合にも変化が起こる。『デンジマン』のシリーズが始まった時には、視聴者の70%が男性だったが、後に50%まで男性の割合が落ち、その分、女性の視聴者が増加した。

2) それぞれ違う動物の特徴を持つメンバーたち

1975年に放送された『秘密戦隊ゴレンジャー』以後、今までに毎年登場してきた五人組の戦隊物には、同じような数と色、そして、トーテミズム的な要素が使われてきた。1979年に放送された『バトルフィーバーJ』は政治的な色彩を帯びている。赤のユニホームを着たチームのリーダーはバトルジャパン (Battle Japan)、他のメンバーとしてはバトルコサック (Battle Cossack) – 五人組の戦隊シリーズでは唯一橙のユニホームで登場した。これは、彼がロシアを象徴する色の服を着なければならなかったのに、赤は既にバトルジャパンが占めていたからであろう。バトルフランス (Battle France)、ミスアメリカ (Miss America) が登場した。しかし、このシリーズ以後登場した五人組レンジャーは現存する、先史時代に存在した、或いは神話の中に出てくるような動物を象徴している。例えば、1993年に放送された『ダイレンジャー』では、スーパー英雄に変身する4人の少年と一人の少女が登場するが、彼らはそれぞれリュウレンジャー (竜を象徴、赤のユニホーム、ダイレンジャーのリーダー)、テンマレンジャー (天馬を象徴、青のユニホーム)、キリンレンジャー (麒麟を象徴、黄のユ

ニホーム)、シシレンジャー (獅子を象徴、緑のユニホーム)、そしてハウオウレンジャー (鳳凰を象徴、ピンクのユニホーム) に変身する。その他にも、戦隊物に登場する5人の英雄たちは鷹や鶴、猿、狼、熊、蛙などの動物に変身する。これは一種の現代版トーテミズムとも言える。それぞれの動物は彼らが持っている肯定的な側面、つまり力や、勇気、知恵のような象徴性がために選ばれ、戦隊メンバーの性格を差別化してくれる。レビ・ストロス (Levi-Strauss) の有名なトーテミズムの批評でも指摘されているように、動物は「社会的区分や関係などを表すのに便利」なのである。

3) 何故五人組にこだわるのか

1981年に放送された『サンバルカン』を除いては、全ての特捜隊は五人で構成されている。この5という数にも注目したい。何故いつも五人なのか。5は位階秩序を意味する。つまり、5人というのは中央、または一番前に一人のリーダーが位置できる奇数である。また、5人は一人のリーダーと一人以上の中間階級、そして一人以上の下位階級を持つことができる最小単位なのである。その中で誰が指示をする位置にあり、誰がその指示を受ける位置にいるのかは明確に表される。

自然と人間の世界を5人組の単位で縮小して、単純化する傾向はこれからも相当の期間戦隊のドラマに影響するだろう。これはドラマの単純明瞭さを得られる同時に、登場人物の性格も鮮明に区分することができるという意味で、とても便利だからである。

4) 何故リーダーは赤なのか

戦隊物のドラマで注目すべきもう一つの点は、色の使用である。それぞれ構成員が着用する衣装は、色を除いてはほとんど同じである。衣装の色はグループ内の序列を記号化した一種のコードなのである。このような五人組の特捜隊員のユニホームの色と序列を比較してみた。但し、同等の序列の色はコンマで、違う序列の色はセミコロンので区分した。

『バトルフィーバーJ』(1979年2月) 一赤；青；橙；緑；白

『電子戦隊デンジマン』(1980年2月) 一赤；黄、青；ピンク/白、緑

『太陽戦隊サンバルカン』(1981年2月) 一赤；青、黄

『大戦隊ゴグルファイブ』(1982年2月) 一赤；黒、青；黄、ピンク

『科学戦隊ダイナマン』(1983年2月) 一赤；青、黒；ピンク、黄

『超電子バイオマン』(1984年2月) 一赤；ピンク、黄；青、黒

『電撃戦隊チェンジマン』(1985年2月) 一赤；ピンク、白；青、黒

『超新星フラッシュマン』(1986年3月) —赤；ピンク、黄；青、緑
『光戦隊マスクマン』(1987年2月) —赤；黄、ピンク；黒、青
『超獣戦隊ライブマン』(1988年2月) —赤；緑、黒；青、黄
『高速戦隊ターボレンジャー』(1989年2月) —赤；ピンク、黄；青、黒
『地球戦隊ファイブマン』(1990年2月) —赤、青、黒、ピンク、黄
『鳥人戦隊ジェットマン』(1991年2月) —赤；青、白/ピンク；黒、黄
『恐竜戦隊ジュウレンジャー』(1992年2月) —赤、ピンク、黄、青、黒
『五星戦隊ダイレンジャー』(1993年2月) —赤；緑、ピンク；青、黄
『忍者戦隊カクレンジャー』(1994年2月) —赤；白、青；黒、黄

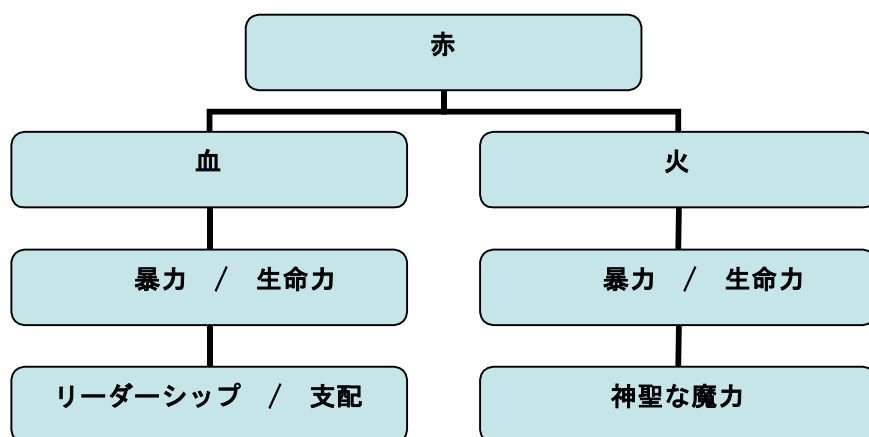
上で挙げた16グループの衣装の色を比較した結果は、次のようになる。

赤(16) —リーダー(16)
青(16) —中間(8)、下位(8)
黄(14) —中間(8)、下位(6)
ピンク(12) —中間(8)、下位(4)
黒(10) —中間(4)、下位(6)
緑(6) —中間(1)、下位(5)
橙(1) —中間(1)
白(1) —中間(1)

上を見ると、分かるように、大概赤のユニホームを着た構成員がリーダーの役割に当たる。地位による色の配列は赤、青、黄、そして、一番地位が低い緑と黒の順になっている。ここで何より目立つ現象は赤のユニホームを着たメンバーが疑う余地もなくリーダーの座を占めていることである。何故赤色なのか。東映映画社は子供の色相の認知度について定期的に調査を実施したが、その結果、日本の子供たちは赤色が一番好きなことが明らかになった。血とか火を連想させる赤色は大抵の文化圏で強烈なイメージを持っているし、それは日本でも同じであろう。五人組の戦隊シリーズでは大規模な火事や、火山の爆発などのように火のイメージがよく登場する。小学生を対象とする番組で見せることができる血の量は限られているが、赤はこのような火と血を象徴していて、子供に強烈なイメージをアピールすることができるのである。赤色と火と血の関係を整理すると次のようになる。

赤色とリーダーシップの関係は、歴史上においても見ることができる。17, 18世紀、日本の天皇は中国式官僚制度を受け入れ、文官を五つの序列に分けた。それぞれの文官は彼らの階級による固有の色の服を着た。当時、一番上位の色は鮮明な紫であったが、この色は古代ローマ帝国でもなかなか造りにくい色という理由で貴き色として、

絶対的な権威を象徴していた。紫に続き、貴族を象徴するようになったのが赤色だった。平安時代（794年～1192年）には、百姓がこのような地位を表す色を使用することは厳格に禁止された。例え紫色が欠けてはいても、約1千年が経っている現代の子供番組で、昔の位階秩序の伝統を垣間見ることができるのはとても興味深いことである。



5) アメリカ式戦隊物

『ウルトラマン』のように、レンジャーという日本戦隊物の形式もこの十数年の間にアメリカへ渡っていった。日本で1992年に放送された『ジュウレンジャー』は、アメリカの情緒に合わせて修正され、アメリカの俳優により、再撮影された後、『パワーレンジャー』としてテレビで放送され、その後にはイギリスのテレビにも登場した。『パワーレンジャー』では『ジュウレンジャー』のユニホームとヘルメットがそのまま使われている。赤、ピンク、黄、青、黒といった順番で表示される色の位階秩序もそのまま維持され、先史時代の動物を象徴するテーマも同じである。

しかし、『パワーレンジャー』からはいくつかの面白い変化もまた見える。アメリカでは、いくつかの色が持つ人種的象徴性を考慮せざるを得ない。従って、黒のレンジャーの役割は黒人の俳優が、黄色のレンジャーはアジア系の女優が演じることとなる。グループ内の位階秩序にも変化が生じる。黒のレンジャーは少数民族に対する差別是正措置の一環でチームの中間位置に昇る。（しかし、これによって女性隊員の地位が落ちることになる。）筋肉質の白人男性が演じる赤のレンジャーは最上位の位置を維持する。しかし、日本版レンジャーが持つ呪術的な象徴性はますます薄れていく。その代

わりに、多くのアメリカ式英雄がそうであるように、パワーレンジャーたちは滑稽なほど政治化されている。

5. 終わりに

子供番組に登場する日本の英雄は何もかも一人でできばきとやりこなせるような、所謂スーパーヒーローではない。彼らが彼ら自身よりも遥かに強く、数も多い怪物や妖怪と闘い、結果的にいつも勝利を収められるのは、彼ら個人の内面的、外面的強さのためだけではない。いつも頼れる仲間がいるからだ。どうやら、日本人は、一人の完璧だが、寂しい英雄は望まないように見える。ウルトラマンとレンジャーたちは家族とか仲間を信頼し、自分が危機に陥った時には何の迷いもなく彼らに助けを求める。日本の子供たちはこのような映像上の英雄を見て、孝行や、友情、協同などの重要性を学ぶ。

このような子供の番組が重大な文化的指標として受け入れられるかどうかには拘らず、これをただ一人の個人的な性向が反映されたものとして取り扱ってはいけない。ウルトラマンシリーズのように、レンジャーシリーズも数十年間にわたって、それぞれ性向の違う数多くの人により創造され、創られた作品である。この類の子供番組の制作に、頑固で個性的な監督の個人的な趣向は存在しにくい。これは日本の広範囲な文化から生み出されたもので、私たちがその文化を理解する上での指標になってくれる。

参考文献

- 西都誠二(1988)「日本文化の中の赤」『世界大百科事典』平凡社
佐々木守(2003)『戦後ヒーローの肖像』岩波書店
Super Stings サーフライダー21(1991)『ウルトラマン研究序説』中経出版
平松洋著(1993)『ヒーローの修辞学』青弓社
無藤隆(1987)『テレビとこどもの発達』東京大学出版会
依田新(1964)『テレビの児童に及ぼす影響』東京大学出版会
Astley,Trevor(1996) A happy Ending:Kofutan no Kagaku and the end of the world. Paper delivered at BAJS Conference 1996, Oxford Brookes University
Ben-Ari,E(1997) Body Projects in Japanese Childcare: culture, organization and emotions in a preschool. Richmond, Surry : Curzon
Bunce, William K.(1955) Religions in Japan. Rutland, Vermont and Tokyo : Charles E. Tuttle